

# 他人の家

古戯都十全

鼻にしみ入るこの家のにおいを知っていた

初めて入ったわけではない、と知っていた

居間に居座るあのテレビはおれが設置した

テレビ台のネジを締めて、

テレビのチャンネルを設定した

夏を焼くような暑い日で、

額から滴る汗を床に飲ませた

居間の窓から見える庭と、

その先に居座る田園風景を知っていた

鋭い陽光が家と家の、

稲と稲の間を通り来て窓を焼き、

家に押し入り、床の色を剥いだことを知っていた

おれはこの家をよく観察し、  
記憶の中にある他人の家と照合した  
記憶は脳から滴り床を染め、  
家と家は鋭く一致した

靴を脱いで、上がり框から、  
家に押し入ったおれの足裏を、  
床の木材がつかむあの感覚  
おれはこの家を昔からよく知っている  
たとえ誰かのものであったとしても、  
決しておれのものでないとは言えないことを、  
知りすぎるほどに知っている

この居間はおれの居間で、  
あのテレビはおれのテレビ  
他人がおれの居間で、  
おれのテレビを見ている

おれはやがてテレビ台からテレビを持ち上げて、

窓から外へ放り投げるだろう

他人の家はおれの家で、

おれはそれをよく知っている

他人はそれを知らないが、

おれは知りすぎるほどに知っている